

この道へ導かれて

渡辺 美和

北村医院助産婦(神奈川県川崎市)

看護学校に入って

私が看護への道を選んだのは、特に医療に興味があったわけではなく、“これからの女性は何か資格をとっておかなくては”と思い、真っ先に頭に浮んだ職業が「看護婦」だったからです。

看護学校に入り、初めての文化祭で、卒業生を招いて経験談を語ってもらうという企画がありました。演者として、産婦人科で働いていた助産婦さんが招かれてきました。その話の内容は、こういうものでした。

「ある妊婦さんが、妊娠中期に陣痛が始まり、薬剤を使っても抑制できず、とうとう分娩になってしまった。出てきた赤ちゃんはとても小さかったが、生きていた。しかし当時は流産の扱いで、その赤ちゃんに対して医学的な処置は行なわれず、ただ、自然に命が絶えるのを待っていた。冷たい膿盆の上で、その子はそれから何時間もピクピクと動いていた。もし何か処置を行なえば、あの子は助かったのかもしれない……。そんなやり切れない思いが渦巻いた。人を救いたいと思いこの職業を選んだのに、動いている命に手を出すこともできない……。とてもつらい体験だった」と。

学生だった私は、看護婦の仕事の中で死に向き合うシチュエーションは、人生を終えた人の臨終位かと思っていました。ですから、助産婦さんのこの死に行く胎児の話は、あまりに衝撃的なエピソードとして心に残りました。

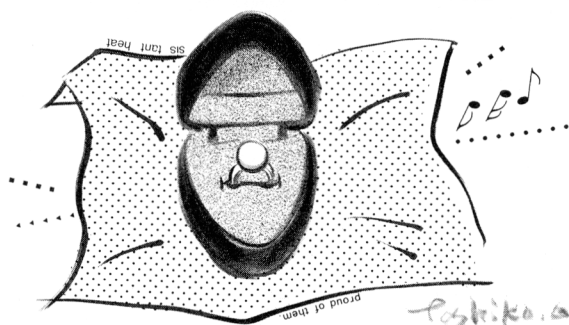
産科実習で

産科の実習が始まったある日、分娩が始まるということで、分娩室へ見学に行きました。

見学中、それまで比較的冷静だった産婦が、分娩台上がったとたんに、パニック状態になってしまいました。ものすごい力で周りの助産婦を振りほどき、分娩台から飛び降りて、「イヤ〜!!」と叫びながら、窓のほうへ突進して行ったのです。驚いた私は、体を動かすこともできませんでした。「ああ、産婦さんが飛び降りちゃう…」と思ったその時、助産婦が何とか押さえつけました。もう、赤ちゃんは発露の状態です。私は、やっとそこで体を動かすことができました。他の学生と一緒に産婦さんを分娩台に戻し、それからは無事に出産が終わったのでした。初めて見た分娩は「感動」というより、「人間は動物なんだ」という印象を持ちました。

それから何日かして、若い女の子が、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いて救急車で運ばれてきました。その子は17歳、精神薄弱があり、どうやら強姦されて妊娠したようです。しかし、彼女はそれに気づかず経過し、「その日の朝、風呂場で洗髪をしていたら、お腹が痛くなり、あつという間に赤ちゃんが生まれてしまった」と言うのです。

彼女は事態をつかめていないのでしょう、キョトンとした顔で、赤ちゃんを抱いていました。親と看護婦間でどういうやりとりがあったのか、学生の私には分かりませんでしたが、数日後、彼女は授乳をしていました。とてもやさしい顔で、自



分の子を見つめて……。複雑な思いの中、それでも母性の強さを感じたことは忘れられません。

産科実習を終えても私は、助産婦を特別に意識することはありませんでした。そして就職を決める時期になりましたが、私は何となく、このまま就職することに迷いを感じていたのです。

その時、進路指導の教務がたまたま助産婦だったこともあり、「あなた、助産婦になれば？ 向いているわよ」と言ってくれたのです。その一言で、“そうだ、そんな道もあったんだ”と、やっと助産婦という仕事を意識し、あわてて助産婦学校を受験したのです。

助産婦学校で

私の母校は、特に思春期教育に力を入れている学校でした。毎年、ある高校に、実習の一環として性教育指導に行きます。自分たちで資料やパネルを作り、学生同士、何回も練習し合い、何度も指導案を書き直しました。人前で話すことも慣れていないのに、気難しい思春期の子が相手……。

不安なまま何とか実習を終え、その後、生徒たちにアンケートを書いてもらいました。その中で、私の担当した生徒の1人が「とても良かった。もっと早くこういう話が聞けたら、私も助産婦になりたかったです」というコメントを書いたのです。私の話を聞いて、“助産婦になりたい”と思ってくれたなんて、ととても感激しました。この出来事は、人前で話すことが苦手だった私に自信を与えてくれ、その後の指導に対する苦手意識を消してくれたのです。そして分娩だけでは

なく、こんな関わりも、助産婦としての喜びにつながるということを知りました。

分娩介助の実習では、やはり実習前に、学生同士、ファントームを用いて介助の手技や、産婦への声かけの練習を何度もしました。

しかしご本番、人生初の分娩介助は、声も出ず、体も思う通りに動かず……。そんな自分が悔しくて、分娩終了後、教務の前で泣きじゃくってしまいました。でもその産婦さんは、何か伝わったのでしょうか、私に対してとても感謝してくれ、退院後の手紙のやりとりは今でも続いています。見るからに未熟な私でも、とにかく一生懸命な気持ちは、伝わったのでしょうか。

今の私、今後の私

こうして私は、自ら“助産婦になりたい”という強い意志があったわけではなく、まるで関わってきた人々に導かれるように、この道に進んできたように感じます。

私自身も妊娠・出産・育児を体験し、それを生かし、今の病院で妊産褥婦に関わっています。一時は産科を退き、内科で働いたこともありましたが、やはり、助産婦としての仕事が恋しくなり、今の職場に戻ってきたのです。皆が導いてくれた道は、私が最も居心地のいい場所だったので。

今後もう少しゆとりができれば、仕事の面で助産婦として深みを増していけるよう、自分の方向性を見出して行けたら、と思っています。

(わたなべ・みわ)